

サイエンスコミュニケーターの 目め

サイエンスマンガ分科会では、新型コロナウイルス感染症に関する4コマ漫画を作成、公開している。機械工学が専門の私がこの活動を始めたきっかけは、私自身の「知りたい」気持ちだった。

新型コロナウイルス感染症の流行が始まった当初、様々な情報が飛び交っていた。例えば、飛沫感染や空気感染という言葉、マスクは感染対策として意味があるのか、アルコールの代替となるものは何か…。高校で生物を選択しなかった私にはこれらの情報を自身で読み解き、適切に取舍選択できるだけの知識がなかった。これでは予防しようにも何をすべきかわからない。

ちょうどそんなタイミングで、友人から、ウイルスの侵入の仕組みを教えてくださいという機会を得た。その友人は、一連の仕組みを図を使って教えてくれた。それを見て、侵入の様子をパラパラ漫画のような短い動画として表現できれば、私のような生物に疎い人でも理解しやすいのではないかと考えたのが、活動のきっかけだ。

しかし、思っていた以上に体の仕組みもウイルスの侵入の仕方も複雑であるため、どうしても動画内に全ての情報を詰めることができなかった。

活動のウラ側

漫画でつなげる サイエンス

濱田 有希

(SC 講座 14 期、サイエンスマンガ分科会代表)

そこで思いついたのが4コマ漫画だった。

その後、科博 SCA の仲間や友人の協力を得て、2020年6月7日に第一弾の漫画を公開することができた。大人向けの想定だったが、この漫画に興味を持った小中高生からも好評だった。

私がサイエンスマンガ分科会で行おうとしているサイエンスコミュニケーションは、「異分野同士をつないで、読み手がハードルを感じずに受け入れられる媒体としてお伝えする」ことだ。ウイルスの侵入というひとつのテーマでも、1人の専門家から話を聴くだけでは漫画は完成しない。たくさんの仲間の協力のもと、ヒトの細胞や免疫、ウイルス自体の仕組みなど様々な分野の知識や視点を集結してはじめて、わかりやすい漫画が作り上げられる。今後も、新型コロナウイルス関係に限らず、人と人とのつなぎとなれるような活動を仲間と共に行っていきたい。



https://note.com/sca_scmanga/

活動紹介

科博 SCA 会員による、さまざまなサイエンスコミュニケーション活動をご紹介します。

2021年6月19日に、SCA 会員向けイベントとして、「ワークショップや懇親会等で使えるオンラインツールを試してみる会」を実施しました。試したツールのレビューなどを SCA ブログに掲載しています。ぜひご覧ください。

実施内容の詳細やイベントの開催予定は「科博 SCAblog」をご覧ください。
<http://kahakusca.edoblog.net/>



科博 SCA の広報誌

サイエンス コミュニケーター だより

Volume 15
October 2021



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座（SC 講座）」を開講し、その修了生は300名以上となっています。本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。



Question 表紙クイズ

これは何の動物の足跡？

- ①タヌキ ②アナグマ ③アライグマ

開いて
答えを
確認！



西川 瑛海
Eimi Nishikawa

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座 SC1 修了(8期)。
株式会社丹青社勤務。日本全国の様々なミュージアムの企画・設計・施工に携わるプランニングを担当。



専門家と一般の方との架け橋になる！

Q. 展示会社のプランナーはどういった仕事をするのですか？

A. チームのあらゆる人をつなげながら、展示のコンセプトから具体的な展示物までを作っていく仕事です。

空間全体の体験ストーリーや展示構成を考えたり、個々のコンテンツのシナリオを作ったりするのが仕事です。展示施設ができるまでには構想・計画・設計・施工という段階がありますが、プランナーは構想から、空間やそれぞれの展示物の設計、時には運営計画まで、広く深く携わります。様々な関係者と協力しながら施設を作るのですが、その中には発注元である施主、お財布を管理する営業担当、設計図を描くデザイナー、制作を指揮する現場責任者、展示内容に詳しい専門家など様々な人がいます。プランナーは、全体像を一番理解してそれぞれの人に伝え、さまざまな立場の人をつなげる役割を担っています。

Q. この仕事を選んだきっかけは何ですか。

A. SC 講座を通じて、科学をはじめ様々な分野のことを多くの人に伝える仕事に魅力を感じました。

学生時代は地球科学の勉強をしていたのですが、専門的なことを突き詰めていくより、今分かっていることを人に伝える仕事に興味を持ちました。幼少期から環境問題に関心があって、昔は「みんなの行動を変えたい」と思っていたのですが、勉強して、色々な人に出会い、様々な経験をするうちに、考え

が変わってきました。他者を変えようと1つの立場から何かを主張するより、より多くの立場からの情報を科学者だけでなく色々な人が共有してみんなで考えていくことが大事だなと。そういったことに寄与したいと考え、SC 講座も受けました。講座で新聞社や NHK の方の話を伺い、メディア関連の仕事をしたと思うようになりました。展示空間は、映像、グラフィック、模型、実物資料等あらゆるメディアを駆使して作り上げる、実体験を提供できるものだと考え魅力を感じ、この仕事を選びました。

Q. 仕事で大変だと感じることは何ですか。

A. 学術的な正確さと来館者への伝わりやすさのバランスをとるのが大変だと感じます。

群馬県長野原町の「やんば天明泥流ミュージアム」* を担当したときは、学術的な正確さと展示の伝わりやすさのバランスをとるのが大変でした。江戸時代の屋敷模型の展示に、当時暮らしていた人の模型を置こうとしていたのですが、当初専門家からは「当時のこの土地の人々の服装等について確たる証拠がないため、人を置くのは望ましくない」と懸念を示されました。でも、コミュニケーションを重ねることで段々と分かり合うことができ、人を描くことに理解を得られるようになりました。私は修士までアカデミアにいたこともあり、専門家の強い思いやこだわりもわかるので、できる限りその思いも汲んでいきたいと思っています。かなり細かい指示が入って大変なこともあります(笑)。こちらも勉強してその分野の理解を深めて、そのうえで「知らない人が見てもわかるように伝えることが大事だ」ということをとにかく毎回伝えています。そうすることでお互い歩み寄り、良い展示を作っていきたいと考えています。

*ハツ場ダム建設工事にともない発掘された様々な実物資料をはじめ、迫力ある映像や模型、ハンズオン展示などで、「天明泥流」という自然災害と当時の生活文化を体感しながら学べるミュージアム。

Q. 今後やってみたい仕事は何ですか。

A. 大地の歴史に触れるきっかけになるような空間を作りたいです。

訪れた人が地球の営みに親しみをもってくれるような、きっかけとなる空間を作りたいと思っています。学生時代に地球科学を専門としていたのですが、日本は地学教育がないがしろにされていて、この分野になじみがない人が多いと感じています。そういう人たちにも地球を知ってもらいたいなと学生時代から思っています。例えばどこかに旅行に行ったとき、一般的なツアーでも人間の歴史の話は組み込まれていることが多いですね。でも、大地の歴史、つまり今見えている自然がなぜこうなっているのか、大地が過去にこう動いてこんなことがあって…というような話はあまりされないように思います。人の歴史に触れるのと同じように、大地の歴史にも触れてほしいです。そのために、この仕事を通して地球の営みを知ることの面白さを広めたいと思っています。

Answer 表紙クイズのこたえ ③アライグマ

タヌキの足跡は4つの指球がつきます。アナグマとアライグマの足跡は共に5つの指球がつきますが、アナグマは前脚で巣穴を掘る習性があるため、長い鉤爪の跡も残ります。アライグマの足跡は、手のひらと指先の跡が残るのが特徴です。

アライグマなどの中型哺乳類の足跡は水辺や田畑で観察できます。足跡を見かけたら何の動物の足跡かぜひ考えてみてください！

